

村上 隆 現代アートで時代をかえる

2013年2月27日
NHKラジオ



2012年2月、カタール政府が首都ドーハで
日本との国交樹立40周年記念として村上氏の個展を開催。
全長100メートルの五百羅漢図が話題を呼んだ。(C)Chika Okazumi

2012年にはカタールのドーハで展覧会を開き、100mに及ぶ五百羅漢図は評判になった。日本では村上作品は評価されないケースが多いがこの五百羅漢は日本人にも好評であった。

カタールは日本からシェールガスの技術を導入し、日本には恩があると王室は言っておられた。カタールはマーケティングとブランディングがしっかりしている。建国50年の国が生きていく、熟成するには経済だけではなく芸術(不純物)が必要なことを知っている。そこから展示を依頼されたが、東日本大震災のあとで人間の無力を感じ・・・作品に手をつけることは出来ず、一旦はお断りしたが・・・

この五百羅漢図に取り組んだきっかけがあった。数ヶ月間対談をした辻井先生が豆粒みたいな米に書かれた五百羅漢を何度も絶賛していたこと。もうひとつは幕末の絵師 狩野一信が書き、増上寺に奉納された秘蔵の仏画・五百羅漢100幅をみてその迫力に驚いたこと。狩野一信の五百羅漢図、色々つつこみどころ満載です。



頭から液体を放出する羅漢様。これは第51幅 神通の部分。神通力を発揮する羅漢様たちが描かれているのですが、どうやら干上がった川に頭から水を出して水不足を解決しているところらしいです。お次は羅漢ビームが描かれている第23幅六道 地獄の部分。凍えるような寒地獄にいる罪人たちを、このビームで救おうとしているところ。

東日本大震災で「絶望を正直に表現するのが芸術だと思った」辻井先生の絶賛した米粒に書かれた五百羅漢の正反対に位置する100mの大きな五百羅漢を手掛けようと思った。

2ヶ月間の製作期間で作品を仕上げた。自分のやり方は建築家と同じ。下準備、図面を引き、素材を準備、大量のアシスタント(今回は延べ300人位)を使い完成させた。この手法はミケランジェロも同じ。

日本では「感じるものに感じる」が日本の教育になってしまった。芸術のルールがわかっていない。自分は芸術のルールが判っているので専門家は理解してくれる。

五百羅漢は雑誌で見る至近距離のもの、実際見るのとは全然違う。実際は4m以上下がらないと見えない。カタールでも西洋の観光客が多く見にきてくれた。

日本では村上作品を評価しない人が多い。藤田 嗣治(ふじた つぐはる)も同じだった。フランスで有名になった藤田は日本に戻ったが日本画壇の嫉妬で受け入れられなかった。藤田は日本画を油絵で表現しようとしたが日本ではきらわれ、パリへ戻った。はしたない・・・と言われた。手塚治も日本画のある人に、デッサンができていないといわれたそうだ・・・日本は「徒弟制度(集団)がある」国なのだ。自分はストーリーテラーとして表現をしたい。

映画を作りたい！の意識で初監督をした「めめずのくらげ」を作成。2023年に劇場公開される。実写とコンピューターグラフィックで出来ている。

自分の考えのベースは「この世の中は理不尽、こんな幸せは長くは続かない・・・しかし、今は皆 そんなことを隠している」

ヴェルサイユ宮殿での個展開催や、ルイ・ヴィトンとのコラボなど、世界的な活躍を見せる現代美術家・村上隆の劇場映画監督第1作。突然、現れた大人には見えない不思議な生き物「くらげ坊」と小学生の少年との交流を描き出すファンタジー。数々のキュートなキャラクターを生み出してきた村上らしさが存分に発揮された力作だ。2013年4月26日(金)一般公開。

新しく引っ越してきた家に、見慣れない段ボールがあるのを見つけた小学生の正志(末岡拓人)。すると中から、くらげのような形でどこか愛嬌がある生き物が出てきた。このなんとも不思議な生き物に、正志はくらげ坊と名前をつける。次第に仲良くなる正志とくらげ坊。転校先の学校と一緒にいくと、他の子たちも、くらげ坊同様の生き物を連れていた。この生き物たちは大人たちには見えず、子どもたちは“ふれんど”と呼んでいた。謎に満ちながらも、夢のような“ふれんど”と子どもたちとの交流が始まる……。

